



## report 01

### KODOMO ラムサール国際湿地交流 in にいがた報告

大熊 孝 (新潟水辺の会・代表世話人)

「KODOMO ラムサール国際湿地交流 in にいがた」が8月20日から24日にかけて行なわれた。ロシア、中国、韓国、タイ、インドから16人、県内高校留学生9人(AFS)、国内から31人、県内から約80人の子ども達が集まり、佐潟、福島潟などでの現地体験を踏まえて、10月末に韓国・昌原で行われる第10回ラムサール条約締約国会議で発表する「KODOMO メッセージ」を以下のように採択した。

「湿地がある、命がある、ほくらがつなげて、宝になる。」

「Wetlands are there, Lives are there, We connect them, They become our treasures.」



佐潟でハス取りに興じる中国からの Sun 君

このメッセージは、未登録の世界の多くの湿地も考慮に入れ、かつ、人間による自然破壊を反省しながら、「つなげる」、「つながる」の意味合いを吟味する高度な議論によって、子ども達的意思によって作成されたものである。

このKODOMO ラムサールは、2005年のウガンダ締約国会議で「子どもアピール」が発せられたことに始まり、国内での8回のKODOMO 会議をへて、この国際会議へと発展してきたもので

ある。この8回のうち1回が、2006年12月の佐潟ラムサール登録10周年記念の時に、新潟で開催された。私は、この会議に深く感動し、この国際版を是非とも新潟で開催したいと思い、実行委員長を勤めさせてもらった次第である。



なお、上が今回のチラシであるが、これを描いてくれたのは太田和宏君(新潟工科大学の修士2年生)である。彼は、中学1年生の時、水辺の会が主催した佐潟でのハス取り大会に参加しており、その際見事なレンコンを収穫してくれたご当人であり、覚えている人も多いのではないかと思います。このKODOMO ラムサールで交流を深めた子ども達が、太田君のように、10年後、20年後も湿地にかかわり、連携して、深刻さを増す地球環境問題に取り組んでくれたらと期待している。

最後に、この会議開催のために、御寄付いただいた皆様に、感謝申し上げます。

## report 02 サケ遡上今昔

昭和31年、1956年11月3日のことだから、今から52年前の話である。

清津川の左支川に釜川という川が流れており、清津川の合流点から1km位の地点に下山砂防堰堤があり、その第2副堰堤工事の監督職員として私は働いていた。



当時の土木工事とは、ツルハシとスコップが主役の人力作業で、この現場でも50～60人の労働者が働いていた。

砂防ダムの第2副堰堤工事というのは、本堰堤の下流が落下水で深掘れしないように副堰堤を作り、さらに副堰堤の深掘れを防ぐために堰堤を作るという工事である。

副堰堤の水通しから滝状に落下する水脈の高さは約2m、私たちの工事はこの人工滝の水しぶきを背にして行われた。

夏の間は滝登りに挑むアユの姿が良く見られたが、10月下旬頃からはサケが跳躍するようになった。誰かがサケの群れを見つけると、作業小屋から投網やヤスなどを取り出してきてサケ漁が始まり、仕事が中断された。腕利きの若者が落下水脈に向かってヤスを投げ込んで、見事サケを仕留めたときなどは現場中が沸き立った。

11月2日、測量などで私を手伝っていたM君が「明日は現場が休みだから、誰もいない。二人で潜ってサケを捕ろう」といつてきた。

いよいよ3日当日、川原の石が真っ白くなるほど霜が降って、見事な快晴だった。投網、ヤス、水中眼鏡など準備を整えてM君がやってきた。川原に流木を集めて焚き火をした後、二人ともフンドシー丁で潜水を開始した。しばらくすると目前に大きな目玉が迫ってきた。

それが水中眼鏡の直前で、鋭い牙をむき出しにして巨大な口を開いた。「サケの亡霊が出た」一目散に逃げて川原に上がった。まもなくM君も上がってきたが、2人とも唇は紫色に変わり、歯をガチガチ鳴らしながら、黙って体の表裏を火であぶった。

サケは巨大で偉大だとつくづく思った。

この秋、この堰堤に遡上したサケの数は如何ほどだったのか、30mほどの水通しを目指して、それほど間隔を置かずどこかでサケの跳躍が見られたことからして、数匹ではなく少なくとも数十匹単位の遡上があったのではないかと思う。

釜川は清津川の支流、清津川はさらに信濃川に支流である。そして、ここに上ってきたサケは宮中ダムの魚道を経てきたものである。

宮中ダムの当時の取水量は167m<sup>3</sup>/s、現在より150m<sup>3</sup>/s少なかった。つまり宮中ダムから小千谷までの河道には、今より150m<sup>3</sup>/s多い水が流れていたのである。

サケに代表される魚類の循環経路を回復させる上で、魚道の設置や改善が必要なことは言うに及ばないが、より根本的なのは河川流量の回復であることを、52年前の記憶が教えてくれた。

150m<sup>3</sup>/s全量を放流することは困難だとしても、せめて1/2の75m<sup>3</sup>/s程度を流さなければ、到底信濃川の河川機能を維持する「正常流量」とはいえない。

新潟水辺の会 副代表 石月 升



report 03  
秋葉湖でカヌー

6月21日(土)、新潟市秋葉区の秋葉公園内にある秋葉湖で、カヌーの体験乗船を行いました。このイベントは(社)新津青年会議所の主催で、



「そうだ!秋葉山で遊ぼう!」と題し、身近な里山(秋葉山)の再生の第一歩として、遊びを通して自然を感じ、見つけ、学びを深めることを目的に企画されたものです。新潟水辺の会は、カヌー体験の協力要請を受け、10人乗りカヌー(通称Tボート)1艇と2人乗りカヌー2艇を持ち込みました。

秋葉湖は沢を堰き止めて造られた周囲約400m弱の人口湖で、水深も浅く、水も濁っていて、オセージにも綺麗な湖(池かも?)と言えるものではありませんでした。しかし、参加された方はカエルやトンボ・魚(たぶんフナかコイ)を見つけてハシャギ、涼しい風に一息つき、山の中にある池に驚くなど、比較的好印象だったと思います。

当日は好天に恵まれ、午後からの開始でしたが、カヌー体験では200人弱の方が乗船されました。

乗船されたほとんどの方はカヌーに乗るのも漕ぐのも、また秋葉湖の中に入るのも始めてで、それぞれ15分弱の乗船でしたが、大人の方は水面の涼しさや水面から見る周りの風景に感動し、子供たちは大きなパドルやオールを持って一所懸命漕ぎ、本当に満足そうな笑顔が見られ、皆さんに楽しんで頂いたと思います。

最後に、暑い中、協力して頂いたスタッフの皆様、本当にご苦労様でした。

世話人 安田 幸弘

report 04  
日本河川協会長賞受賞

平成20年4月、国土交通省信濃川下流河川事務所から日本河川協会へ、多年にわたる当会の活動が多方面でも高く評価されていることについて報告した所、協会から是非、表彰したいと連絡が入り、事務所の課長がわざわざ知らせに駆けつけ、報告を受けました。

早速、会員に喜びを連絡、これも一重に水辺の会との連携、ご指導の賜物と感謝しながら当日を待ちました。



2007年8月24日 栗ノ木川の夕べ

5月23日、東京麹町にある財団法人日本河川協会の会議室において全国から表彰された団体に混じり受賞時間を待つこと暫時、名前を呼ばれ表彰台に立ち、次のような表彰文が読み上げられました。

「貴団体は通船川及び栗ノ木川において河川環境美化活動等に携わり河川愛護の思想普及とその実践に努められましたその功績はまことに多大なものがありここに記念品を贈り表彰します」

とあり盛大な拍手に包まれ、会員にその事を報告、希望者に一生の宝物としてカラーコピーにして渡しました。

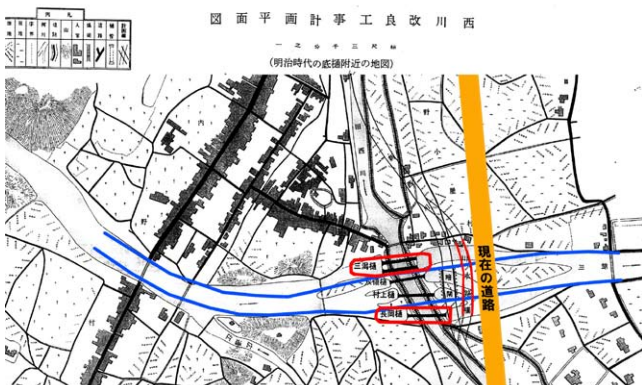
皆様、ご指導ありがとうございました。

通船川・栗ノ木川ルネッサンス  
代表 星島 卓美

## 近世土木遺産の発見！140年前の新川底樋探查

新潟市内野に、川と川とが立体交差されている場所があることをご存知の方が多いと思います。かつての西蒲原は、西川と中ノ口川に挟まれたお盆の底に鎧潟、大潟、田潟の三潟があり、排水は早通川を通じて西川のみでした。そのため雨が降ればこの付近一帯の排水は不能となり、三年に一作と言われていました。

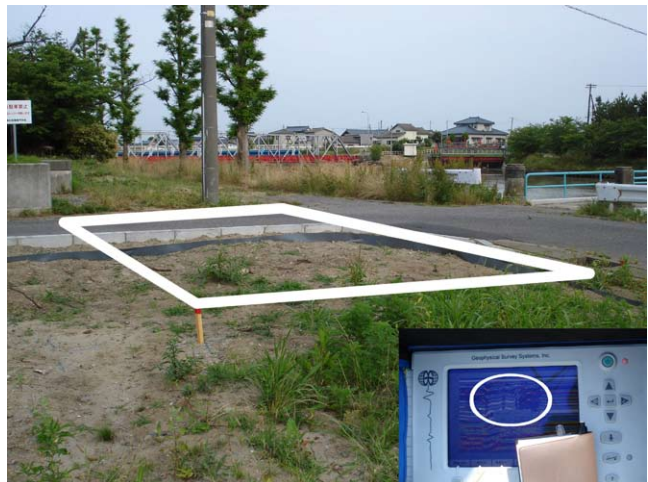
中野小屋割元の伊藤五郎左衛門ら18名の願人が多くの問題を解決して文政3年(1820)1月、2年の歳月と200万人の労力によって西川の下に、底樋と言われる樋管(水路トンネル)2門を設けて、西蒲原の悪水を日本海に流すことに成功しました。その後数度の改修工事を行い、現在は実り豊かな西蒲原となっています。大正2年には、煉瓦とコンクリートによる9門の新川暗闇が完成しました。その後昭和30年、現在のトラス二連の水路橋となり現在に至っています。



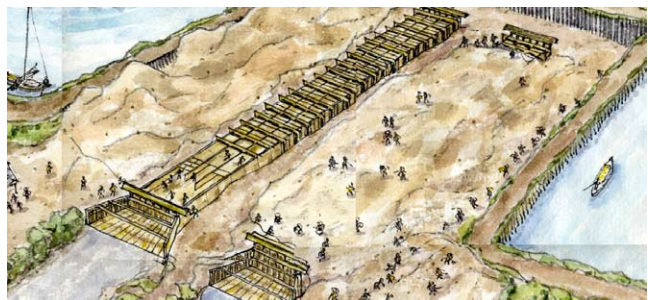
十数年前より新川の歴史に興味を抱き、新川の成立過程を映像と冊子にまとめた中で、新潟県がまとめた『西川改良及新川底樋改造工事報文』の1枚の図面に出会いました。

その図面は、現在の地図に当てはめると140年前の慶応の木製の底樋2～3門が、新川兩岸の地中に残されている可能性を示すものでした。大正2年の新川暗闇工事の際、河道内にあった村上樋、双領樋は工事の際に流れを妨げる為撤去されましたが、左岸堤防近くにあった長岡樋と右岸堤防外の三潟樋は埋め殺しされたのではないかと考えるようになりました。世話人の山岸さんに相談した処、山岸さんの友人の協力が頂けることになり6月16日午後2時より、新川右岸の第一候補地を所有者の許可を得て、三潟樋の地中探查の試し調査を行って頂きました。

もしも地中に底樋があるとすれば、高さ六尺(約1.8m)、幅三間(約5.4m)、長さ三十六間(約65m)の木製です。探查機のモニターには、図面と同じ場所の地下1.5mに、幅5m×7mの範囲で、明らかな反応が出てきました。(線の内側)



発見されたなら間違いなく、新潟市西区の近世土木遺産の一級品に指定されることでしょう。だがこの土地の所有者が近い内に家を建てるため、残念ながらこの土地を掘り起こしての調査を諦めざるをえませんでした。



現在は第二候補地の左岸の土地の所有者を探しています。実は法務局に行って所有者を尋ねたのですが、登記されていませんでした。その後、新潟県河川管理課や西区区役所に行って尋ねましたが登記されていないため課税すらされていない土地でした。

今後は所有者を探して再度探查し、慶応の底樋を発見したいと願っています。しかし、地中の底樋の確認が出来ればその技術などの基礎調査は行いますが、100年後の子孫にその姿を残す為に、掘り起こさないのも一つの選択肢と考えています。

世話人 加藤 功



report 06  
通船川住民清掃構想

現在、通船川では水辺の会で月に一回の定期清掃があり、通船川ネットでは年に一回、クリーン作戦が実行されています。川清掃は川再生の基本であることはいうまでもありません。しかしその目的と効果の評価が明確ではなかったように思います。「川をきれいにする。」という目的はいいのですが実際川はきれいになってきたのか？と自問するとき自画自賛は簡単ですが実際は疑問符がつくのが現実です。なぜか？

1. 私達の清掃の力が足りず捨う量より捨てる量が多いから。
2. 川清掃などかかったら面白くなく参加する気にならないのでやる人が少ないから。
3. 現状の川利用をそのままにして川清掃で川がきれいになるとするのは偽善であるから。
4. 人が食うために川が汚れるのは当然でそれをきれいにするというのは原理的に無理だから
5. 川がきれいになっても一銭にもならないからなどという理由があるのかなと思います。どれもすべてその通りです。ではこれらの点をどう解決すればいいのか考えなければなりません。

1. に対しては社会啓発と捨う量をふやす。  
2. は川清掃と面白い川遊びをつなぐ。  
3. は企業と住民に川利用を再考してもらう。  
4. は食う量を減らし、川に排出する汚物量を減らす。  
5. は川がきれいになると儲かる仕事を構想しよう。番外として川を汚した者にはその汚れを回収させ、豚箱にしばらく入ってもらうことにする。

- これができれば通船川の水質はすぐに改善するだろう。通船川をきれいにするためにはこれらのことを川掃除と平行して実行する必要があります。具体的に構想します。
1. 藤見町、大形町、津島屋に板合せと川ゴミ集積所を置き、町内の有志から交代で川清掃をやってもらう。また植える場所を選定し蓮、菖蒲、がま、あやめを植える。
  2. 月一回の川清掃と川遊び(カヌー遊び、板合せパン食い競技など)を一緒にやる。
  3. 川関係企業に川利用の縮小と利用方法を再考させ、下水道未接続家庭に接続をお願いする。
  4. 不景気の風もあるが食う量を減らすことを美徳

とする社会に誘導する。

5. 櫓漕ぎ和船に乗って蓮の花、花菖蒲、通船川舟歌を楽しみ、川から取れる蜆汁、はぜのテンブラ、地酒を堪能できる川業を立ち上げ、利益を地元還元するシステムを考える。

番外 通船川条例を住民で合意し、罰則を明確にする。

1. は藤見町、津島屋を除き、今年から、2. は来年には始められるだろう。3. 4. 5. は5年を目標に行動したい。番外は10年が目標である。



8月9日の清掃、カヌーと板合せ

さて通船川再生運動も10年を超え、再生の中身が問われる時期を迎えた。この間再生の中身についての意見の相違が明らかになり、いま再生運動は分裂状態にある。意見が違ふのは当たり前でどちらに流れてゆくのかは責任を含めて住民が決めることである。ここで私は合意できるところで連合しようと呼びかけたい。合意できないところはそれぞれ切磋琢磨すればいいことである。最低限のルールとして〈お話だけの先生になることはやめよう、一兵卒として働くことを前提にしてやってゆこう〉ということを確認できれば可能であると考えている。通船川再生の道はまだ遥かに遠い。しかし遠いからといって行動することを避けてしまふとき単なる道徳を騙る者となる。おなじ間違いを繰り返してはならない。

通船川草刈隊 横山 通 2008,7,27

# report あわしま物語の調査編

## 1. はじめに

我ら同士の浅井さんの呼びかけで始まった粟島訪問、きっかけは、浅井さんが粟島に魅せられ交流を深めてゆくなかで、粟島に残された自然や生活文化を島民が守り、受け継ぐ姿を目にして、これは、島民だけでなく島外の人々からも知ってもらい、粟島での物語の発見を期待して企画したものである。

参加者は、大熊会長以下、計15名で粟島行きが初めての人もいて、多彩な顔ぶれである。5月24～25日に実施された。

島の主要産業である漁業は、近年不振の年があり、その原因が磯焼けによるとのこと。その磯焼けの原因が、これまで進めてきた島の開発行為(堰堤や一周道路などの建設)が影響しているとの声が聞かれた。これまでインフラ整備に関わってきた者として、これが本当であるとしたら、どのようにすれば回復への道筋がつけられるのかを語り合う必要がある。そのためには、現地を見て主たる要因を確認する必要があるため、今回の粟島行きに参加した。

## 2. 磯焼けとその原因

磯焼け現象は、新潟県内の海岸のみならず、近年全国的な現象として発生しており、海底における海藻が豊富に生い茂っていた場所が、何らかの原因により海底の様子が一変して海藻林が、消失して僅かな藻類が固着している状況をいうのである。



写真一 場所:大浦、水深:1～3m

大浦の海底では、玉石の上部表面の藻類が消失し海底との接触面の周辺に僅かに藻類が固着している。かつては、船が近づけないほどに海藻類が生育していた。(写真一)

一般的な原因としては、海流の変動により栄養塩が沿岸域に到達しなくなった。あるいは、陸の土地利用の変化などにより陸から補給されていた必要、必須な物質が不足するようになった場合に発生する。また、海藻の生

育量よりも底生生物によって食べられる量の方が大きくなった場合などで、原因は、一つではなく幾つかの要因が重なり合って発生すると考えられている。

## 3. 調査結果と考察

調査は、海上からと一周道路からの観察をおこなった。釜谷港から神丸俊夫氏の漁船にて仏崎、鳥崎を回って内浦港までの約12kmを海上から島の北西斜面の植生や斜面崩壊の様子、沿岸の海底状況などを観察した。



写真二 堰堤の上下流部とも草木が繁茂

堰堤建設による沿岸の海藻類の消失については、建設時において多少の土砂流出が発生したものと思われるが、堰堤下流部の浸食作用は見あたらなかった。どの堰堤の上下流部とも草木が繁茂しており、河床部は安定している。(写真二)

一周道路(林道または工事用道路)建設による沿岸の海藻類の消失については、急峻な地形からして建設当時は、大量の掘削土砂が海岸部に落下、一部は汀線を超えて海底部まで到達したものと予想される。しかし、現在の法面は草木が活着して、かなり安定してきている。(写真三)



写真三 一周道路から汀線までの法面



report  
あわしま物語の調査編

地元の方の話によると、昭和39年の新潟地震以前は、北西斜面の各沢からそれぞれ沢水が海へ流れ込んでいたが、地震後ほとんどの沢水が枯渇してしまった。地震により島の東側（内浦）が1.5m、西側（釜谷）が0.8m隆起したことなどが、島の地下水脈を変えてしまったものと思われる。現在、西側で海まで沢水の表面流水が到達している沢は2箇所だけである。その結果、陸域からの栄養物質が沿岸部へ流入しなくなったことが挙げられる。

また、地元の方の話によると「道路建設時に大量の土砂が海に流れ込み海水の色が変わっていた」とのことから、かなりの土砂が沿岸海底部へ流出、堆積したものと思われる。

現在は、建設時から10年以上を経過しており、海流で流失したり海底堆積物として安定しているものと思われる。

磯焼けのその他の要因として、

1. 海水温度の上昇:30年前に比較して1°C上昇している。その結果、海藻類や魚種に変化が生じている。
2. 信濃川の影響:水温、流出土砂(島内の沢からの流出土砂も含めて)。
3. ウニ等の影響:ウニ等が海藻の新芽を好んで食べるため、海藻が育たない。

次に、粟島の植生について、島の北西斜面と南東斜面で大きく異なっていることが判明した。北西斜面においては、高木は全くなくエノキ等が点在して、その周辺は草地となっている。(写真—4)

一方、鳥崎を回って南東斜面を見ると、高木が繁茂しており、沿岸の海藻類も船が接近できないほどに生育しているのを確認した。(写真—5)



写真—4 北西斜面の低木と草地

#### 4. まとめ

磯焼けの原因は、1 堰堤や一周道路の建設時における大量の土砂流失による沿岸海域の汚染。2 新潟地震によ



写真—5 南東斜面の高木林

る沢の表面流水が枯渇。3 北西斜面の植生。4 海水温度の上昇。などが、複合して10年、20年と経過するなかで発生したと予想される。

この復元には、「森」を造り表面流水を回復させることではないかと考える。植生の専門家による島の植生調査を行って、適した在来種による植林を目指すものと考えている。地元の方の話では「冬季の強い北西風のため植林に適さない」というが、工夫することにより解決できると考えている。例えば、俵マット、板柵等である。

堰堤や一周道路建設時の影響については、建設から10～15年を経過しており、当時の土砂が海底部に残っていて海藻発育に悪影響を及ぼしているとするれば、その除去である。そのための沿岸海底調査が必要である。陸上部については、草木が繁茂しており現時点では安定していると思われる。

次に、この報告から外れるが、地域活性化策として現在、島の内外の方々による取り組みが活発に行われているので、観光振興面での提案を1つ行う。

現在、粟島汽船は岩船港と内浦港の往復である。粟島だけの観光ではなく新潟、月岡、岩室、弥彦と山形県庄内地方(例えば出羽三山など)を結ぶルートに粟島をセットにする。

朝、新潟を出発して岩船港から粟島で昼食にワッパめし、粟島から鼠ヶ関港へ、バスはお客を岩船港で下車、鼠ヶ関港で乗車して庄内地方で宿泊、翌日出羽三山など観光するコースを企画提案する。この逆コースでもよいし、佐渡の鷺崎港に結んでもよいと思う。

今後、機会があれば企画編で、粟島の活性化策についてモニターツアーなどの提案を試みたいものである。

山岸 俊男

## 台湾・嘉南大圳 視察報告 (1)

この6月25日(水)から29日(日)かけて、妻・宏子と台湾旅行をしてきた。この旅行は、私の新潟大学退職を記念して、退職祝賀会に参加いただいた方々から贈られたものであり、いつもの海外旅行とは違って贅沢な旅行をさせてもらった。

退職記念旅行に台湾を選ばせもらった理由は、私の祖父・大熊米次(1876～1925)が台南にある嘉南大圳という灌漑システム事業にかかわっている最中に死去しており、その事業の成果を確認したかったからである。嘉南大圳は、約15万haを灌漑する一大水利システムであり、1930年に総事業費5,314万円で完成している。ちなみに、大河津分水の事業費は1927年の完成時で2,354万円である。これと比較して、日本がいかにか台湾を重視し、嘉南大圳に力を入れていたかがわかる。その水源は濁水溪と曾文溪という川であるが、曾文溪から取水された水は、トンネルの導水路を経て、烏山頭ダムに貯水される。この烏山頭ダムの貯水量は1億5400万m<sup>3</sup>と黒四ダム(1963年完成)を超える貯水量であり、当時アジア最大のダムであった。



曾文溪から烏山頭ダムへの取水口  
(取入れ口が2段になっている)

この設計・施工にかかわったのが、八田與一(1886～1942、金沢出身、1910年東京帝国大学卒業)である。八田は今なお台湾の人々から尊敬

を集めており、5月8日の命日には毎年慰霊祭が行なわれており、今年の慰霊祭には反日的といわれる総統・馬英九氏も参列されたとのことである。



八田與一の銅像の前で  
(嘉南農田水利会顧問・徐欣忠氏に説明を受ける。)

祖父は、八田より10歳年上であり、台湾総督府の官吏であったが、嘉南大圳水利組合が設立されたとき、会計係長として、八田技師とともに嘉南大圳水利組合に出向した。祖父は、大変酒好きであったが仕事熱心で、嘉義の宿舎では毎晩一升瓶を横に置きながら仕事をしていたと祖母に聞かされた。また、謹厳実直で、会計担当でもあり、お歳暮やお中元が贈られてきても、すべて送り返していたという。ただ、関東大震災の後で資金繰りがままならず、東京への出張も多かったとのことであるが、過労がたたって、事業費をほぼ集めきったところで、来月からは仕事が楽になると言いながら、1925年5月31日に49歳で急逝した。

私が土木屋になったのは、この祖父や八田與一について祖母からよく聞かされていたことに遠因があるといえる。ただ、私は日ごろ「ダムは川の敵対物」と言っており、今回の旅行で確認したかったことは、八田がダムへの土砂堆積問題をどのように認識していたか、ということである。



report

## 台湾・嘉南大圳視察報告(2)

濁水溪はその名の通り、土砂含有量が多く、八田はこの川にはダムを造らず、取水口も埋設で取水できなくなることを想定して3箇所も設けている。烏山頭ダムは、曾文溪の支川に造られており、導水路で曾文溪から取水されている。ただ、嘉南大圳での使用水量は膨大であり、それをまかなうためには土砂を含んだ洪水も導水しなければならなかった。そのため、取水口は2段になっており、洪水時には土砂の少ない上水を取水するように工夫されていた。この取水による土砂と、トンネルの出口から烏山頭ダムまでの導水路で河床の洗掘が激しく、それらの土砂で烏山頭ダムは急速に土砂堆積したとのことである。

しかし、導水路は戦後すぐに洗掘防止策がとられ、また、曾文溪取水口から約6km上流に有効貯水容量6億3000万 $m^3$ という曾文ダムが1973年に完成しており、曾文ダムそのものへの土砂堆積問題は残されているが、烏山頭ダムへの土砂の流入はほとんどなくなったといえる。なお、現在の有効貯水容量は約8300万 $m^3$ とのことであり、約46%堆砂したことになる。

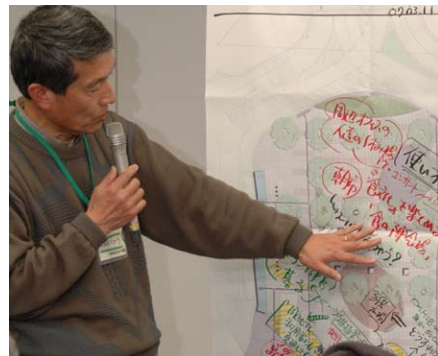
八田はダムの土砂堆積をかなり気にしていたことが理解できたが、当時それを防ぐ手立てはやはりなかったといえる。それはともかく、祖父がその事業成功に情熱を傾けた地を訪れ、今93歳の母の通った嘉義の小学校を確認し、私の人生の空白部分を埋めることができた。記念品代をご提供いただいた皆さんに、こころから感謝申し上げます。

大熊 孝  
(新潟大学名誉教授)

report

7.19 小疇さんを偲ぶ  
元祖にいがたのまちづくりフォーラム

まちづくりの仲間、建築家の小疇弘一氏が2008年5月4日急逝されました。小疇氏を偲んで次のまちづくりを考え、行動しようという仮称『こあぜプロジェクト』が提案され、7月19日にそのあり方を議論する「元祖にいがたのまちづくりフォーラム」が開かれました。



新潟での市民参画のまちづくりの先駆けとなった小疇さん  
(写真協力 NPO 法人まちづくり学校)

故小疇弘一氏と当会との関係は、1991年第8回水郷水都全国会議新潟大会の分科会進行をお手伝いいただいて以来の仲です。

その後1999年のワークショップ全国交流会新潟大会、萬代橋の重文指定にともなう市民六団体での萬代橋景観リレーフォーラム、信濃川やすらぎ堤懇談会などで一緒にまちづくりの提案を出し合いました。

私はこのフォーラムで、小疇氏(61歳)の過去の功績賞賛だけでなく、彼が存命なら80歳、90歳と考え、20年30年先の未来への光跡をイメージしてより広い市民の賛同共感を引き出すことが大事と提案しました。

それは我々の『水辺復権のまちづくり』と同じように、住む人や訪れる人に快適で固有な空間づくりです。

それを椅子で表現する「小疇さんの椅子プロジェクト」を提案しました。

従来のように寄付して街なかにベンチを設置するというものではなく、デザインや設置プロセスなどに市民ひとり一人の顔が見えるような椅子プロジェクトの提案です。

提案しっぱなしにならないように、水都新潟の街なかに市民個々の個性で市民公共事業を行なう、『私』の見える『小疇さんの椅子プロジェクト』を実現したいと思います。

世話人 相楽 治

## 新潟水辺イベント情報 新潟水辺の会 & 関連団体ほか

9月20日(土)

通船川栗ノ木川下流再生市民会議

時間:13:30~16:30

会場:東区東山の下小学校(新潟市)

参加費:無料

内容:通船川の通になろう双六ゲーム、子どもたちの発表、沿川企業の紹介、分科会報告、できること、やってみたいこと、提案できることワークショップ

問合せ:新潟県新潟地域振興局地域整備部

TEL/025-231-8328

9月20日(土)~21日(日)

全国ボランティアフェスティバルにいがた2008

~みんなでつくろう!ボランティアの知恵の輪~

時間:10:00~16:00

会場:朱鷺メッセ(新潟市)

参加費:無料

内容:一般参加型イベント「ふれあい広場」ほか

問合せ:第17回全国ボランティアフェスティバルにいがた実行委員会事務局

TEL/025-281-5805

9月26(金)~28日(日)

第1回「いい川・いい川づくりワークショップ」

会場:国立オリンピック記念青少年総合センターほか(東京都)

参加費、内容はHPをご覧ください

問合せ:「川の日」ワークショップ実行委員会事務局

TEL/03-3408-2466 FAX/03-5772-1608

<http://www.mizukan.or.jp/kawanohi/kawanohi.htm>

10月4日(土)~5日(日)

しなの川考流会(水辺視察及び学習会)

時間:新潟駅南口駐車場 出発7時30分

日程:4日 信濃川(ダム、発電所、小千谷市調整池、妙見堰)中津川

5日 大河津資料館、横田切れ

宿泊:アネックス飛鳥(長岡市寺泊野積)

懇親会:日本海夕陽ブルワリー

参加費:往復交通費(自家用車乗合)+10,130円(宿泊代懇談会)

問合せ:森本 TEL/090-1613-1879

10月8日(水)

第2回つうくり森舟部会(公開です)

時間:午後6:30~8:30

会場:山の下排水機場

(通船川側左岸、北越製紙工場西側道路から)

問合せ:相楽(森担当)、安田(舟着き、舟小屋担当)

10月12日(日)

第4回新潟市市民活動フェスタ

時間:10:00~17:00

会場:新潟市市民活動支援センター、古町どんどん

参加費:無料

内容:ミニステージ、団体紹介コーナー

問合せ:新潟市市民活動支援センター

TEL/025-224-5075

11月2日(日)、3日(月、祝)

川の全国シンポジウム—淀川からの発信—

場所:京都大学時計台ホール(京都市内)

11月8日(土)

信濃川流域シンポジウム

時間:未定

会場:長岡市内

参加費:無料

問い合わせ:信濃川ファンクラブ 相楽

11月29日(土)

2008水辺シンポジウム

~第5回水枯れの大河・信濃川にサケの道を拓く~

時間:14:00~17:00

会場:ホテルディアモント新潟 バンケットルーム鶴

参加費:無料

内容:活動報告、パネルディスカッションほか

問合せ:NPO法人 新潟水辺の会 加藤

TEL/025-230-3910

**編集後記:**政令市になった新潟市は今年も様々なイベントが行われています。ジャズストリートなど様々なジャズコンサート、「新潟みなと水遊記」と銘打った萬代橋誕生祭を初めとする信濃川や新潟港での20以上の水辺関係のイベントなど、楽しい催しが各所で行われています。新潟市のホームページなどにも情報は載っていますが一般の市民まで知られていないのが現状です。私に関わっている新潟市市民活動支援センターでもチラシなどを置き、その一部は知る事は出来ますが、参加して欲しいイベントが市民に知られずに終わってしまうのは残念です。新潟みなと水遊記 HP <http://www.minatomachi-niigata.jp/suiyuki/>

去る7月12日に水辺の会の通常総会が開かれ、様々な事柄が論議され、その中で水辺だよりの話も出ました。水辺だよりは季刊を目指していますが、まだ年4回発行出来ていません。会員への情報発信手段のひとつである会報はしっかり季刊で発行したいと思います。編集人:森本 利

### ●事務局からのお願い

インターネットメールで随時会員の皆さんに情報をお届けしています。メールアドレスを新しく持った方、アドレスを変更された方は事務局までお知らせください。

### ●発行:特定非営利活動法人 新潟水辺の会

#### ●事務局

〒950-2264

新潟市西区みずき野4-7-15 大熊 方

Phone 025-264-3191 Fax 025-264-3260

ホームページ

<http://www17.plala.or.jp/mizubenokai/>

メール [mizubenokai@plum.plala.or.jp](mailto:mizubenokai@plum.plala.or.jp)

●会員数 個人会員217名、法人会員11団体  
(2008年9月1日現在)